

「桜御殿五十三駅」の諸本

——『増補日光郡郵枕』浄瑠璃化をめぐって——

内山 美樹子

一

明和八年十二月二十九日、大坂竹本座（座本竹田榮蔵）初演、近松半二、榮善平、寺田兵蔵、松田ばく、三好松洛（後見）合作、「^{亭主は一休禪師}桜御殿五十三駅」は、書誌的、文献的側面で、近松没後の浄瑠璃正本中、最も取り扱いに注意を要する作品の一つである。第十一「花の御殿（桜御殿）」の段に、七行正本モト版刊行直後に、管見に入った二十三の正本中でも、七行、十行併せて、四種の異本が認められる。

『近世邦楽年表』の作品解説では、本曲に關し、「本朝檀特山」の改作」と記すのみ——「本朝檀特山」は、一休を主要人物とする享保十五年五月豊竹座、並木宗助らの浄瑠璃——であるが、千葉胤男氏は、昭和五十年春季、日本近世文学会「加賀見山旧錦絵について」の発表で、天明二年正月、江戸外記座初演「加賀見山旧錦絵」前半に、本作（第六まで）が大幅に流用されていること、「加賀見山旧錦絵」は加賀

騷動物であるが、「桜御殿五十三駅」自体は、柳沢騷動物と考えられること、を指摘された。

既に中村幸彦氏は「八文字屋本版木行方」（『国語国文』十一二、昭和十五年）において「明和壬辰年（安永元年）三月二十日、作者増舎大梁・半井金陵で彦太郎版の「桜御殿郡郵の枕」は「頼朝三代鎌倉記」改竄……題名まで、旧年から今明和九新春にかけて竹本座の欄にかかった「桜御殿五十三駅」（『近世邦楽年表』義太夫之部）と、明和五年正月の「けいせい郡郵枕」か、同年九月の「花扇郡郵枕」^{（1）}（『大歌舞伎外題年鑑』）そのあたりの歌舞伎外題とを組合せた八文字屋振である」と述べられたが、「けいせい郡郵枕」については『歌舞伎年表』に「松永の役は柳沢を当込めり」との注記があり、正徳二年「頼朝三代鎌倉記」（改題本『桜御殿郡郵之枕』）と柳沢騷動の実録体小説『日光郡郵枕』との關係も、中村幸彦「柳沢騷動実録の転化」（『中村幸彦著述集』十）「読本發生に關する諸問題」（同五）、長谷川強「紀海音の浄瑠璃に及ぼしたる八文字屋本の影響——「鎌倉三代記」、「傾城無間鐘」について」（『国

語と国文学』三十六年九月)、『浮世草子の研究』(『当世御伽草』と「今川当世状」等で指摘されている。

以上の如く、柳沢騒動物としての「桜御殿五十三駅」の側面は、ほぼ押さえられているといえるが、先学の研究は、本作の他作への影響の指摘が専らで、本作自体の作品研究は行なわれていないようである。但し、松井今朝子「近松半二小論」(『演劇学』十八、昭和五十二年)では、本作に關し、

妻が將軍に見染められたことをきっかけに、妻子を犠牲にして國家簞箏を企んとする岩見太郎左衛門と、將軍の不明故彼の行動に翻弄されつくす足利幕府とを冷やかに眺めながら、自ら権力に恬淡として飄々と生きる一休禪師の姿に、自己を強く投影させることによつて、『桜御殿五十三駅』に於て彼は、過去の状況に近世人半二の目をもちこむ方法での現代劇化を果さんとした。今日で云う歴史小説的視点を有したとも云うべき此の作劇法を、安永期の半二は執拗に追い求める(以下略)

と、素材には言及しないが、作品の特色に触れた鋭い論評を試みている。

「桜御殿五十三駅」第十の主筋——東山の將軍義政が、寵臣岩見太郎左衛門の献じた側室蘭の方の色香に迷い、天下の兵乱、將軍家の滅亡を願ぬことを憂えた北の方富子の方が、寝所において將軍刺殺をはかる——は、『日光郡野枕(増補)』で、奸臣柳沢美濃守に籠絡される五代將軍綱吉の、政道を過ち、徳川家の相統を危くする所行を未然に

防ぐために、御台所鷹司氏が、井伊掃部頭の進言に従い、將軍を弑する条の脚色である。『日光郡野枕』自体が、明和八年の『禁書目録』所載の書である上、「桜御殿五十三駅」にはこの件り前後にも、幕府將軍家に関わる字句が少なからず、当局の忌憚に触れることを恐れて、短期間に、段階的改訂が行なわれたものであろう。

「桜御殿五十三駅」は、初演時の興行事情に關しても、いささか疑問点を残すところがある。現存番付による限り「桜御殿五十三駅」新作一本の上演であるが、『外題年鑑安永版』には、

享主方東山殿桜御殿五十駅同年十二月廿九日
上客一休禪師 徳本竹田栄蔵

此節竹本大隅十七回忌政太夫十三回忌追善として切に古浄る
り毎日取かへ十日ヶ間相つとむ 麓太夫出座

大切ニおどけ上るり

雷太郎君代言葉

と記す。『まず竹本大隅(大和掾のことか)十七回忌、政太夫十三回忌追善云々』といつても大隅掾(大和掾)は明和三年没、二代目政太夫は明和二年没、十三回忌とか十七回忌には結びつかない。「此節」「十日ヶ間」等が、具体的に何月何日をさすのか、はつきりしないが、「桜御殿五十三駅」は明和八年十二月末日初日、実質的には九年(安永元年)正月興行で、明和八年ならば政太夫七回忌、九年ならば大隅(大和)七回忌に当てはまるので、両方にかけて八年末から九年初の興行で追善を行なったものか。麓太夫は「桜御殿五十三駅」の番付には名が見えず、切の旧作(古浄る)は近松・文耕堂・宗輔等の作)一段のみに

出演したものであろう（四月二十八日初日「義方武士鑑」に出演）。

大切の滑稽浄瑠璃「雷太郎君代言葉」正本（所見本松竹大谷図書館蔵）

は、吉川宗兵衛版、七行十二丁。座本竹田栄蔵。作者名・刊記なし。

表紙に「竹本咲太夫ワキ竹本町太夫」とあり、滑稽浄瑠璃を得意とした初代咲太夫（男徳斉）の出し物である。が、咲太夫は「桜御殿五十三駅」で第三切（岩見が鷹匠から幕府の重臣にまで出世する重要は段）と第九と、二段に出演しており、特に第九は、非人達の縄張り争いを、謀叛人劇風に見せる滑稽仕立の一段である。この後二段（第十・第十一へ二丁余）併せて一段分と、旧作一段）において、再び咲太夫の滑稽浄瑠璃を見せるのは、いささかくどい。しかも「雷太郎君代言葉」二場と、旧作の切場一段併せて二時間程度を要するであろうが、九十八丁（実丁は九十六。なお同明和八年「妹背山婦女庭訓」は百丁）の長編時代物の後に、これだけの付け物を添えるのは、上演時間に無理があるように思われる。

とすれば、本体の新作浄瑠璃「桜御殿五十三駅」が、何かの事情で、完全上演が行なわれなくなり、一部を削除または変更した、その穴を埋めるために、急遽、旧作の人気曲の切場一段や、賑やかな滑稽浄瑠璃が添えられたと、考えられないだろうか。

勿論「桜御殿五十駅」が上演禁止を受けたとか、当局から一部削除を命じられたとかいう記録はない。のみならず、後述の如く、第三段階の改訂本（埋木本C乙）に、初演時のものとみなされる節付け書入れをもつ一本があり、問題の第十「桜御殿の段」は、初演以後、相当

期間（モト版と埋木本の間に貼込み本が存在）上演されたに相違ない。初演時の興行事情に関する伝承の不確実さと、「桜御殿五十三駅」正本の度重なる改訂とは、一応、分けて考えるべきかも知れない。たゞ上演続行の前提として、埋木本の如き詞章の改訂が必要であったとは考えられ、国家の乱れを題材とする「桜御殿五十三駅」の後に、殊更、君が代を寿ぐ外題の短篇を添えることも、「桜御殿五十三駅」書卸し当初から、決められていたとは、断定し難いのである。

正本の書誌的、文献的側面及び初演時の興行事情に、問題を残す「桜御殿五十三駅」は、戯曲そのものとしても（芸術的完成度が高いとは言い難いにせよ）作者の着想、演劇の持つ現代批判性等において、単に実録体小説の脚色、という以上に、注目すべきものがある。

御台所による綱吉刺殺説は、現在、史実として認められていないが、半二と同時代人で京都町奉行所与力であった神沢杜口は『翁草』（『元宝莊子』を含む）でこの件を秘説として記し、「あたらずと云へども遠からざるべし」とみている。事実である与否とにかかわらず、言論統制のきびしい近世において、幕府將軍家の重大事を、演劇という公開の場でとりあげた作品は、必然的に、政治的、社会的側面を担わされることになるが、しかしその面を、なるべく避けて通るか、そこに積極的関わりを持つかは、作者の姿勢如何にかかる。本稿では、紙数の関係で「桜御殿五十三駅」の全貌を把握することはできないが、第十の詞章改訂をめぐる課題の検討を通じて、この点に関わる浄瑠璃作者近松半二の劇作法の解明を行ないたいと考える。

二

『日光郎鄺枕』『増補日光郎鄺枕』は、近世民衆思想史の分野で注目される文献の一つで、林基「近世民衆の社会、政治思想研究の史料的基础(二)」(『専修史学』六。一九七四年) 山本詔一「『日光郎鄺枕』について」(『専修史学』十。今田洋三『江戸の禁書』などで考察がなされている。前掲中村幸彦氏、長谷川強氏、戦前の三田村鳶魚氏などの研究とも併せて、『日光郎鄺枕』とその系統諸書の成立、展開、著者等に関する説明は進みつつある。^{*}『日光郎鄺枕』から、『護国女太平記』に至る、柳沢騒動物の主要書を、中村説により、成立順に掲げれば左の如くである。

日光郎鄺枕 宝永六年〜正徳元年

増補日光郎鄺枕 寛延頃(但し一般には原初の『日光郎鄺枕』も

『増補日光郎鄺枕』も含め、『日光郎鄺枕』と総称。『国書総

目録』でも一括して挙げる。明和八年の『禁書目録』に載る

『日光郎鄺枕』は、勿論「増補」を含むものである。

元宝莊子 安永四年(『翁草』卷七十七、七十八所収)。

護国女太平記 天明以前

原初『日光郎鄺枕』は、柳沢吉保の奸佞と悪政を糾弾する短篇(都立中央図書館加賀文庫蔵、「日光かんたん枕」『宝永六己丑八月』所見)で、御台所による將軍殺害の件りはなく、実録体小説としての形を整えた

『増補日光郎鄺枕』に至ってこの件りが加わる。但し正徳二年の浮世草子「頼朝三代鎌倉記」に、將軍頼家が安房の局に殺される筋があり、長谷川強氏は、綱吉没直後に、すでに広まっていたこの種の巷説(今田氏『江戸の禁書』は『鸚鵡籠中記』などを引用)に基くかともなしておられる。中村氏は『増補日光郎鄺枕』の綱吉殺害の筋に關し、「噂があったとしても……『鎌倉記』の影響は……無視出来ない……浮世草子の影響を実録が受ける……小説史と実録の交渉」を指摘される。

『増補日光郎鄺枕』を演劇に脚色した、「桜御殿五十三駅」の先行作に、明和五年正月初日、大坂三軒座(中の芝居)の歌舞伎狂言「けいせい郎鄺枕」がある。劇評を収めた評判記『役者言葉花』(明和五年三月刊)の挿絵に「けいせい郎鄺枕 写本六冊」とあって、当時この実録体小説が、相当広く行きわたっていたことが窺われる。

『増補日光郎鄺枕』から「桜御殿五十三駅」に取り入れられた、筋趣向の主なものを、左に列挙する。

○「郎」主人公柳沢弥太郎は、家禄百五十俵の輕輩から、將軍綱吉の寵を得て、甲府十五万石の城主、美濃守に任ぜられ、天下の政道を恣にするが、実は徳川家に怨みを抱く武田家の後胤で、秘かに諸大名をかたらい、將軍家を滅す謀叛の陰謀をめぐらす。

「桜」東山將軍家の鷹匠太郎治は、足利義政公の寵を得て、岩見太郎左衛門と名乗り、管領職にまで出世するが、実は先年滅された赤松満祐の遺児(赤松三郎)で、足利將軍への後讐の機を窺

っている。(第三、第七、第八、第十、第十一)

○「邯」綱吉は柳沢の妻お床(護国女太平記ではおさめ)を寵愛、また柳沢の養女万代姫の腹に出生(護国女太平記ではおさめに出生)の若君綱千代(後の柳沢吉里)に將軍職を譲ろうとし、柳沢には、駿府百万石を宛行なうお墨付を与える。

「桜」義政は岩見の妻お蘭を側室とし、その懐胎の子(実は岩見の子)に將軍職を譲るお墨付を与える(第二、第七、第十)。

○「邯」綱吉は甲府宰相左馬頭綱重の子綱豊(後の將軍家宣)を嗣子と定めた後、万代姫出生の綱千代に迷い、綱豊を疎んずる。世子決定以前、柳沢、護持院ら綱豊を調伏、綱豊乱気となる。

「桜」義政の弟左馬之介(義祝)は、傾城雪の戸を溺愛し日輪の旗を奪われ発狂、將軍は左馬之介を討てと命ずる(第三、第七)。

○「邯」柳沢は大望成就の晩には、將軍綱吉はもとより、養女万代姫に出生の綱千代をも苦し、徳川將軍の胤を絶やす心である。

「桜」赤松の足輕渦兵衛は、娘傾城雪の戸が、足利將軍の弟左馬之介の子を宿していると知り、亡君の敵の胤を絶やすため、密かに娘を殺す(第五、第六)。

○「邯」護持院隨從の日輪院・月輪院。

「桜」將軍家が天子より預る日輪の旗、月光の旗(第三、第八、第十、第十一)。

○「邯」御犬医者今川平助

「桜」犬引早介、実は宗純法親王(二休)の御犬(スバイ、懷刀)

蜷川新右衛門(第二、第三、第八、第七)。

○「邯」柳沢は將軍御成の時、御座の間の庭前に東海道五十三次道中の風景を作り、歓楽を尽さしめる。

「桜」將軍家花の御殿で、宗純法親王から遣わされた、客分のお犬蜷川新右衛門饗応のため、五十三次を庭の内に取入れてみせる。

○御台所による將軍殺害の件りは、大要は二二頁に記した通りだが、「桜御殿五十三駅」の本文に、モト版と改訂版とで大幅な異同があり、歌舞伎「けいせい邯鄲枕」との関係も、この件の扱いが焦点となる。詳しくは後述。

三

「桜御殿五十三駅」の七行正本は、奥書に竹本義太夫博教、山本九兵衛・吉川宗兵衛・鱗形屋孫兵衛版。題簽に吉川宗兵衛版。丁付九十八(実丁九十六)。所見の七行本十七本のうち、奥、題簽を欠く四本以外は、すべてこの同じ奥書を有する。十八世紀末以後、丸本の再刊された形跡はなく、奥、題簽欠本も、実質的に初版本と考えられる。

本曲は、現在のところ、寛政二年(一七九〇)二月十一日より、名古屋の稲荷社内⁽³⁾、文化七年(一八一〇)二月二十九日より、大坂北堀江荒木芝居と、二回の再演記録が知られるが、後者は番付に「作者近松湖水軒・佐川藤太」(別番付は佐川藤太のみ)の名があり、淀屋事件が組み合わされ、主人公の名も、やながせ左右衛門と改められるなど、

一種の改作で、大坂に於る原作通りの再演は、現存資料による限り、行なわれていない。従って、現存七行本三本に、初演時の太夫役割、節付等の書入れがあるのは、初演時（乃至その直後）に書入れられたものと考えてよいであろう。

十行本は、六十五丁。所見六本の中に、菊屋七郎兵衛版・鶴屋喜右衛門版、奥欠本とあるが、いずれも同版で改訂等は認められない。十行本の書入れ本も未見。

以上の如く、「桜御殿五十三戻」の現存正本は、七行、十行とも、初演時に刊行されたもので、その初版本の中に、(A) 七行モト版本、(B) 七行貼込み本、(C) 七行埋木本、(甲乙)、(D) 十行本、の五種の正本が存在する。

Aの文章上不穏当な箇所、改訂字句を刷った紙を貼り込んだのがBである。現存のA即ちモト版で貼り込みのない丸本が、果してこの形で市販されていたか、或いは市販される前に、版元がすべてBの形に改めたにもかかわらず、二世紀余の間に貼紙が剝がれて失なわれ、Aの形に戻ったのか、貼紙の不安定な性質上（現存本に改訂箇所すべての貼紙を残すものはない）、断定は困難とも言えるが、現存のAには、現況は貼紙のないモト版本であっても、明らかに糊付けの跡を残すものと、そういう痕跡を認めえぬ、いたみも汚れもない綺麗な本とがあって、後者は、少なくとも四本を数えうる。やはりAの形で刊行発売された後、Bが作られたとみなしてよいであろう。

CはBの貼紙した箇所に、埋木による改訂を行なったもの。但しB

で貼紙改訂された所で、Cではモト版のままの箇所があり、これに甲乙二種が存在する。

Dは十行本発行に際し、BCを踏まえ、さらに何ヶ所かの訂正を加えたもの。この際に、文章に乱れを生じた箇所もある。

第十の改訂箇所と、五本の状況は左の如くである（引用文には節付けは省く）。

(一) A お客分きやくぶん「の大殿。御機ごき」嫌けんは宜よろしうござるかな、(丁付八十一。

岩見太郎左衛門と山名宗全の對話)

Bは「内を「蜷川。御機」と貼紙。Dも同文。C甲C乙はモト版(A)のまま。

(二) A 近習小姓きんじゆ下部迄。何なんのかのときめ付る「人嚙かみ犬。こまり」入つた物(八十一。(一)の続き)

Bは「イヤハヤ殆ほととこまり」と貼紙。C甲はモト版のまま、C乙は「イヤハヤ殆とんとこまり」と埋木。Dは「きんじゆ小姓しもべ迄。夫にはや何のかのときめ付る。イヤハヤほとんどこまり」。

(三) A 我身「は犬と呼人よびを」虫共。見下みくだす權柄けんぺい。(八十一。蜷川の出)

Bは「は荒男。人を」と貼紙。C甲はモト版のまま。C乙はBと同様に埋木。Dも同文。

(四) A 親王も同前「の此犬。我俤わいご」は御用捨ごようすてなされ。イヤ尼利うしかぎの政道せいどう。我々が胸中を吟味の為。法親王より付置つける、「御犬。此」上ながら御前宜ごぜんよろしう。(八十四。蜷川と岩見の對話)

Bは「の此蜷川。我俤わいご」「蜷川様。此」と貼紙、Dも同。Cは前者

は同じだが、後者は、三字分の埋木が難しい為か「付置るゝ蟻川。此上ながら」となり、文調わず。

(四) A 腹胎の男「子に国家を譲る墨付を。蘭の方にあたふる間。汝後見と成て。弥」忠勤励むべし(八十九。將軍義政の岩見への言葉)。

Bは「子は二代の跡目此後迎もかはりなく家國を大切に。弥」と貼紙。CDも同。

(四) A 今爰で「邯鄲」の枕。(九十。蘭の方と蟻川の對話)

Bは「點丹」と貼紙。Cも同じだが、フリガナは「こんたん」に近い。Dは「こんたん」(ひらかな)。

(四) A 大將のお妾とかふいふ事。大名共が見付たら。見たら大事か。

(九十。同右。)

Dのみ「東山殿のおてかと……見たら大事」。

(四) A 「犬引の時」分から見入た女房。……いつそ「天井ぶち抜。犬

様。蘭殿。」(九十。同右。)

Bは「傍輩の時」「天井ぶち抜こちの人。お蘭殿」と貼紙。CDも同。

(四) A 「こはそもいかにと目もうろく。泣く音押へて。コレサ御合点が参ったか。サ、驚歎は御尤至極なれ共。お部屋の色に魂奪はれ。腹に有子に家國を譲りの墨付。此俥に指置ば忽乱世。此事禁庭の御聞に達し。武將の職をめし放さるべき御評定。今宵金閣寺へ御参詣。宗純親王御対面の上。右の趣仰渡さるゝ筈。其時は足利の御家も」是切。禍の根を断ば。御舎弟左馬の介殿に。

御家督相続家長久。コレ。国家万歳の基ぞと聞に弥悲しさの。夫故にこそ様々の。心遣ひも苦勞もすれ。是計は赦してと(九十一、九十二。北の方と蟻川の對話)。

Bは「そんならあのお蘭殿を自が手にかけて。殺せとの御事か。たゞさへ恥有女子同志。下くのやうにはしたなふ格氣と君の思し召が。イヤサ爰をよく御合点なされ。あのお部屋を生置ては國の乱れ。君金閣寺へ御出なき内。御前でお部屋をすっぱりと。左なき時は足利の御家も」と貼紙。Cも同。Dは「内はBと同文だが、その後の「夫故」(おつとゆえ、とよむはず)を「夫故」(それゆえ)と改訂。

(四) A ヲ、お出かしなされた。親王に御対面の後は再び返らぬ。(九十二。同右)

Dのみ「ヲ、お出かしなされた。わざわひの親王に御たいめん有てののちは」とある。文調わず。

(四) A 御寐所に。血煙人音はつし。目も紅に血走るお蘭。何故にあの狼藉。狂乱有しか北の方(九十二。蘭の方の言葉等)。

Dのみ「御しんでんに。血けふり打あふ人おとはつし。目もくれなゐにちばしるおらん。何故にあのらうぜき。御しんしよへふんごみ給ふは御きやうらんか北のかた」。

(四) A 我子に給はる「お墨付指上ますがせ」めての云訳。……突貫けば悪人退治せめて夫の命一つは。お願ひ中そと思ひしに。(九十三ノ五。同右。)

Bは「御厚恩。元返すがせ」と貼紙。Cも同。Dは「御かうおん元へ返すが」「つきつらぬけばあくにんたいぢ。是迄のおにくしみ。せめて夫のいのち一つは。」

(四) A 猶も「寐所に歩寄。行当つたる褥の下。首かき切て提出。隠し持たる罽毼。敵の首とふしぎの見参」。今ぞ本望成就と。(九十六。岩見が將軍を弑せんとする件り)。

Bは「奥の間寐殿に。臥たる直宿の首かき切り。隠」「ふところより取出し」と貼紙。Dも同。

(四) A 「御大将」義政公上杉を御供にて裏御門より(九十六。岩見への家来の注進)。

Dのみ「」内を「東山の」と改訂。なお国会本(B)に「御大将」の脇に朱筆で「東山の」と書込み。

(四) A 我は是より「大将」をぼつかけて只一討。(九十七。岩見の言葉)。Dのみ「」内を「義政」と改訂。

(なお演博本(B。二一十一—二九〇)第十一九十八の岩見の言葉「將軍義政」の「將軍」に、白紙を貼付する)

前述の如く、第三段階即ちC乙の埋木本で、初演時とみなされる筋付け等の書入れを持つもの(国立文楽劇場本)があり、右四段階の改訂は、きわめて短期間に、急いで行なわれたが故に、B↓C甲↓C乙の如き訂正洩れも、文章の調わぬところも生じたのであろう。

書卸しの文章に対し、版元、興行主、または作者自身が、不穩当とみなした基準も、改訂状況から、ある程度窺われる。即ち

① 五代將軍綱吉を連想させる「(お)犬様」は勿論、「人嚙犬」「犬引」、要するに犬という字は一切差し控える(但し第十以外の段で用いるのは構わない)。

② 禁書『日光郡鄆枕』を連想させる「郡鄆の枕」の語は避ける。

③ 將軍が国家や徳川家の重大な事柄に関し輕卒にお墨付を与えたという件りは不穩当。少くとも、「国家」「墨付」の語句は削除。(但し九十六に「お墨付」の語一ヶ所残る)。

④ 漠然と最高権力者をさす「大将」は不可。「東山の大将」とか「義政公」とか、室町時代を徹底させること。

⑤ 將軍の北の方による殺害という筋は不可。また仮にも將軍の首を掻き切る場面を見せることは不可。

⑤が改訂の最重要点であることは、いうまでもない。ところで、同じ演劇という公開の場で、『増補日光郡鄆枕』を取り上げた先行作、明和五年の歌舞伎狂言「けいせい郡鄆枕」で、これら不穩当な箇所は扱いは、どのようになされていたのか。台帳が現存せず『役者言葉花』(明和五年三月刊)の記述により内容を知るほかないが、少くとも、將軍が、忠臣多門頭の示唆をうけた谷木坂(柳沢)の妻お柳に殺される筋はあり、「桜御殿五十三駅」の如く、將軍が実は生きていた、との結末でもない。また外題自体も『日光郡鄆枕』の脚色であることを明示し、②の点は留意されていない。人名に関しても、主人公を史上の人物赤松の家臣岩見太郎左衛門に当てはめる「桜御殿五十三駅」より、「谷木坂」、妻「お柳」、故主の娘「おさめ実は月光姫」などとする

「けいせい邯鄲枕」の方が、いわゆる御沢騒動「実録」に近い。「けいせい邯鄲枕」の上演が、支障なく行なわれたとすると、三年後の「桜御殿五十三駅」の方が、きびしい制約を受けることになったのか。

既に触れた如く、「桜御殿五十三駅」初演の四ヶ月前、明和八年八月、京師書林刊『禁書目録』に『日光邯鄲枕』が挙げられている。浄瑠璃正本は、大坂の劇場で上演される人形浄瑠璃の台本であると同時に、読物としても全国向けに発売され、劇場の内部資料たる歌舞伎台帳とは、性格を異にする。特に京都版元と関わりの深い十行本は、読物としての側面が強い。「桜御殿五十三駅」の煩雑なまでの詞章改訂は、この読み物としての面に、特に注意が払われたため、とも考えられ、十行本に最も多くの改訂がみられるのも、それなりに納得がいく。

けれども、「桜御殿五十三駅」打上げの頃、明和九年三月二十日、大坂升屋から八文字屋本『頼朝三代鎌倉記』の改題『桜御殿邯鄲枕』が刊行されているところを見ると、強ち読み物である故に『禁書目録』との関係から、強い規制を受けた、とも断定し難い。本書は「桜御殿五十三駅」の影響を受け、最初に一休、蜷川の間答等を加え、最後に始終は一休が東山殿の亭で見た夢（『頼朝三代鎌倉記』では八牧主水之助の夢）であったと締めくくる。丁付「七」以下の本体は版木流用、目録の文章を多少目新しくしているほかは、内容的に改変はなく、安房の局による將軍頼家殺害の件りにも、一切手加えられていない。六十年前の本の改題とはいえ、「桜御殿五十三駅」で改訂を必要とし

た「邯鄲の枕」の語句が、同時期に、書き本ならぬ刊本の題名に用いられ、將軍刺殺の筋も温存されているからには、明和八年以後、特に出版統制がきびしくなった、とも考えられない。

明和五年正月の「けいせい邯鄲枕」、八年十二月の「桜御殿五十三駅」、九年三月の『桜御殿邯鄲枕』と『日光邯鄲枕』と関わりの深い三作品のうち、資料の現存状態の違いはあるにせよ、一応詞章改訂を迫られたのが「桜御殿五十三駅」のみであるのは、浄瑠璃の読み物としての面、『禁書目録』との関係等を考慮に入れるにしても、最終的には、内容に、他の二作より以上に、不穏当な部分が、「桜御殿五十三駅」に、認められたためと考えるべきではないか。

四

近松半二の浄瑠璃は複雑な推理小説の如く、筋が掴みにくいので有名であるが、「桜御殿五十三駅」も、第十後半は、余程注意して読み進まぬと、話が通じなくなる。本作の場合、モト版では、作者が意図的に、分りにくく、ぼかした表現を用いているからである。

「四海万民の為に、宗純親王より北の方へ御内意の密書」を蜷川から北の方が受けとって読むところから、二一七頁に掲げた(4)の文となるが、モト版では、北の方に「驚歎」をもたらした密書の内容を、作者は、はっきりと書きあらわしていない。たゞ蜷川が「禍の根を断ば。御舎弟左馬の介殿に。御家督相統家長久」、北の方が「夫故にこそ様

々の。心遣ひも苦勞もすれ。是計は赦して」というからには、現將軍の一命に關わる事柄で、北の方がついに蜷川の勸めに従い、「御赦されて下さりませ。」と詫びて、守り刀を携え、寢所へ忍び入ること、^{（四）}「國の爲家の爲」に將軍を殺害する決意であらうとの推測は成り立ち得るが、義政公とか我君とかの主語、目的語が一切省かれ、具体的に何をするかという点の叙述もないままに、はじめての観客や讀者が、右の如き要点を掴むことは、かなり困難であらう。

が、これだけ神経を使った表現をもつてしても、正室による將軍殺害という重大事を、舞台にかけることは許されず、B以下の改訂となるので、宗純法親王の密書の内容が、B以下の「あのお蘭殿を自^{みづか}り手にかけて。殺せとの御事」となれば、主君を迷わす愛妾を斬るという、お家騒動の最もありふれた筋立てで、その限りでは単純明快である。特に十行本（D）では「夫故に（おつとゆえに）」を「夫故に（それゆえに）」と捨て仮名「レ」を入れて「夫（將軍）」の語を完全に払拭している。「御寢所に。血煙人音はつし／＼。目も紅に血走るお蘭。何故にあの狼藉。狂乱有しか北の方。」あの狼藉とは、具体的には將軍殺害をさしているはずで、十行本に「あのらうぜき。御しんしよへふんごみ給ふは」と付け加えられたのは、寢所に踏込んだことが狼藉で、それ以上のことはないとの限定である。二人とも深手を負い、お蘭が許しを乞うと、北の方が「イヤのふそもじの云訳より。罪はわらはも同し事。天が下に一人の身も賤山かつの妹と背も。女の身の太切は。夫より外なき物を。悪人に連添は悪事なすも夫の爲。惜や貞女の

蘭の方」。との言葉は、中途から蘭の方のことに話を転じているが、北の方の「罪」の内容は、夫殺しとみるべきである。

岩見が二女の話の後で立聞きし、北の方を刺殺し、寢所に踏込み、「行^{あた}当つたる褥の下。首かき切て」とあるのは、例によって省筆が多いが、この時はじめて岩見が將軍を殺すのではなく、既に死んで横たわっている首をかき切るのである。いずれにせよこの死骸——北の方が手^てにかけ、岩見が首を切った——は直宿の侍で、お蘭は、北の方の將軍殺害の決意は知らぬが、夫岩見がかねてよりの謀叛の計画を、今夜実行に移そうとしていることを知り、將軍を密かに寢所から落としていた。最終的に將軍が生きているのであるから、B以下の如く、將軍殺害の件りをそっくり抜いても、何とか話の辻褄は合うものの、やはり筋立てに齟齬、矛盾を生じ、一方モト版に則していえば、はじめから玉虫色の表現の連続であるから、筋が分りにくいのは当然である。ともあれ、將軍の無事は、後に観客に判明するにもかかわらず、^{（五）}仮にも謀叛人が將軍の首をかき切る如き場面はよろしくない、と、B以下では始めから「臥^ふたる直宿の首かき切り」と説明してしまう。

「桜御殿五十三駅」において、これ程敢しく排除されねばならなかった將軍殺害の件りが、「けいせい邯鄲枕」では、谷木坂の妻お柳が「多門頭に氷の謎をもらひ心をくだき。かくごを極め義てるを手にか

け我もじがいし死る」場面が支障なく演じられたのはなぜか。
まず「けいせい邯鄲枕」は、趣向は柳沢騒動であるが、世界としては（義輝、松永弾正等で明白な如く）東山の世界の中でも、室町幕府

崩壊前後を扱う「津国女夫池」「祇園祭礼信仰記」「本朝廿四孝」等の系列に属する作品である。とすれば、將軍暗殺は、いわば筋の必須条件で、「祇園祭礼信仰記」のように、愛妾花橘が、過失ではあるが、將軍義輝を殺す筋立ても既に行なわれており、この土台の上に、柳沢騒動を加味し、観客の実録的興味をそったとしても、現徳川幕府、將軍家との繋がり強く意識させることは少ないと思われる。一方、「桜御殿五十三駅」の如く、東山殿義政、山名、一休の時代で、將軍殺害という筋は（たとえ先例はあっても）、特殊であり、観客に、外形的時代設定や、歌舞伎の世界と趣向の概念とは別に、特定の現代史の時と処が、意識されることになる。

次に「けいせい邯鄲枕」で放蕩な將軍義輝を演ずる坂東岩五郎は、敵役であつて、歌舞伎の役柄の約束事から、この人物は、いわば、いずれ退治されるべき悪人、として観客に受けとめられているので、將軍の存在感は甚だ薄い。「桜御殿五十三駅」の義政は、人妻を妾とするなど、行状はよろしくないが、単なる暗君ではなく、茶の湯や歌道の嗜み深く、宗純法親王（一休）を金閣寺に迎えようと望むなど、対朝廷の政治的動きもみせ、將軍としての權威は具わっている。

「けいせい邯鄲枕」には義輝の正室は登場しない。將軍が暗愚で足利家の相続覚束なく、しかも家臣の妻お柳に道ならぬ恋をしかけ、諫めても聞き容れないので、忠臣多門頭の示唆をうけて、お柳が將軍を殺すという筋で、ここではお柳はどこまでも家臣の妻であつて、將軍に懸想されてはいても、妻とか妾とかではない。因みに『頼朝三代鑑

倉記』（桜御殿邯鄲枕）で頼家を殺すのは、愛妾安房の局である。將軍が妾や家臣の妻に殺されるのは、不祥事には相違ないが、殺される側と殺す側との間に甚だしい身分の隔りがあつて、この場合、殺す側の、心情においては諒死の変型、現象的には主殺し、という形で、即ち封建的主従関係の極限状態の一類型として、理解されうる。しかし、將軍と同格の地位にある御台所による殺害は、余人が決して犯すことの出来ぬ最高權威の内部に亀裂が生じたことであるから、その、社会的影響は、はるかに深刻である。「桜御殿五十三駅」は、書き本のみが扱い、公刊の浮世草子や、演劇という公開の場の先行作が、避けて通つた深刻な命題を、あえて劇のクライマックスでとり上げたのである。

北の方富子の方自身、懊悩の末に、国のため家のために、將軍を殺した、と思ひ、観客も、將軍は殺された、と思ひ込んだ跡で、実は將軍は落ちのびていたという設定が用意されていることは、題材の深刻さを緩和する役割を果しているともいえるが、將軍家が存続する限り、個人の生死は、体制側にとって、第一義の関心事ではない。將軍義政は、命は助かったが、この事件を契機に、政治的生命を失ない、宗純法親王に朝廷の意に叶う義視政権が誕生をみることになる。

「けいせい邯鄲枕」で、將軍殺害事件が描かれるのは「中入」即ち前半部であり、後半部に芝居としての様々な展開や愁歎場が用意されている。中入の中でも、將軍刺殺の件は、それほど大きなヤマ場ではなく、むしろ、三拼大五郎扮する松永弾正（八木坂・柳沢）の謀叛が

頭われ、切腹する時、かけつけた妹お滝（中村富十郎）に「（娘）おさめは古主の御種月光姫也、其方より立我無念本懐^{ほんかく}を達せよ」と遺言し、お滝は愁歎の末、彈正を介錯、首を持って帰る「三十石燈^{よそわのほしき}始に喜代三殿のせられし仕内」等の見せ場が注目されている。彈正即ち柳沢役の三拼大五郎は、実悪と立役を兼ねた役者で、謀叛を企むところは実悪であるが、謀叛が露頭し、松永家が没落し、妹に故主の姫の守護を託して悲壮な切腹を遂げる件りは、立役の領分であり、以後、遺された者達は、松永家の再興、彈正の遺言の成就に向って、立役路線で行動することになり、柳沢騒動『増補日光郡鄕枕』の構想とは全くかけ離れたものになる。

「桜御殿五十三駅」では、北の方の將軍刺殺の決意、岩見の謀叛露頭を頂点とする第十が、全曲最大のヤマ場である。主人公岩見太郎左衛門は、仇敵東山將軍家のために妻を献じ、子を殺し、政権の内懷ろに喰い込んで、この夜一挙に大望を成就せんと謀るが、彼より一枚上手の宗純法親王（一休）の周到な計略に操られた北の方の、予想外の行動と、妻お蘭が夫と主君の思ふ余り、將軍を落ちのびさせたことで、すべては水泡に帰する。前々年「近江源氏先陣館」の第八「盛綱陣屋」、前年「太平頭整飾」（現行「鎌倉三代記」の原曲）の第七「絹川村」と同じく、第十「桜御殿」の切場は、明和後半期浄瑠璃界の第一人者、竹本鐘太夫の所演であった。

台帳の現存しない「けいせい鄕鄕枕」と、「桜御殿五十三駅」とを、戯曲面で詳しく比較することは、不可能で、評判記の記述からの推定

には誤りもありうるが、以上の検討を通じて、二作品の焦点の違いは、ほぼ押さええられたのではないかと思う。同じく『増補日光郡鄕枕』の脚色とは言え、「けいせい鄕鄕枕」には、現代史的視点が乏しく、將軍殺害の件も、従来の世界と趣向の枠内で、しかも比較的軽く扱われているので、「桜御殿五十三駅」の如く、当局を憚り、削除や改訂が云々されるような段階には、至らなかったであろう。

五

明和八年十二月末日に初日を明けた「桜御殿五十三駅」が、明和九年（安永元）初春興行として、次の「騷方武士鑑」に外題が替る四月二十八日以前の、いつまで上演されたかは詳かでない。ただおそらく本曲興行中に『頼朝三代鎌倉記』を『桜御殿鄕鄕枕』と改題刊行する企画が立てられ、竹本座に対立する北堀江市之側豊竹此吉座でも、菅専助らによる追隨作が生まれ、半二自身も、翌年再び柳沢騒動物を手がける、などの動きは、「桜御殿五十三駅」の評判を反映したものと思われ、興行としては成功の部に属したと推定される。しかしそれは、最大のヤマ場である第十の主題が骨抜きにされた形で、「国の為家の為」にもせよ、本妻が妾を殺すというだけの卑小な筋立てに改められ、岩見の謀叛の行動も、観客の目からは明白な、直宿の侍を、將軍と取り違えて首をかき切るといった、凄味のないものになり、その他、作者の意図や諷刺が籠められた語句も削除された上での、興行的

成功であった。

「桜御殿五十三駅」第十の詞章改訂が、興行主乃至版元の自粛によるものか、或いは、その筋から注意を受けた結果であるかは、明らかでないが、改訂作業自体は内容の細かい点に立入ったもので、版元が勝手に行った訳ではなく、立作者半二の手になるものであろう。

半二には、この種の、出版等取締令への抵触に關しては、前年、明和七年の大坂落城劇「太平頭整飾」の上演禁止を受けた前科がある。再三当局を刺激するとあっては、上演禁止はさておき、敲罰の処断も下されかねない。半二としても改訂作業には、それなりに気を配らざるを得なかったであらう。

六

將軍家の歴代の伝や政治上の問題をあつかったものを、後々講談では、御記録読みという。……『日光かんたんの枕』の内容は、一つの五代將軍政治史で、御記録読み風に發展する要素をもつものである。が一方、一国の家老などが主家横領を画策する筋は、講談では御家騒動という。……『かんたんの枕』は又、御家騒動風に展開する要素を持っていた。……『かんたんの枕』の夢中談の初めに、徳川家康が、かつて是という字を片手で握った夢を見た。これは是の字を分析した「目下人」を握る、即ち天下人になる兆であるが、片手即ち五代までは無事だが、六代目が心配だと

夢判断されたことが見える。……御記録読みでは、女性の出る幕が殆どなく、吉里を落胤とする一条をそのままに存するのみである。かえって後々にも伝わる、百万石の墨付を小笠原佐渡守が、吉保から取りもどす一条が詳かであるのも、御記録読み風である。『かんたんの枕』を御家騒動風に展開させたのが、『増補日光邯鄲枕』（『近世実録全書』第一卷所収）である（中村幸彦「柳沢騒動史録の転化」）

「桜御殿五十三駅」は、演劇であるから、当然女性が活躍し、お家騒動的色彩も濃厚であるが、同時に、天下国家——最高権力のあり方、朝廷と幕府の關係、百姓の減免要求に対する幕府の対処如何等、難問解決をめぐる主人公岩見太郎左衛門の、幕閣としての政策上の手腕を描くことも、疎かにはしていない。『増補日光邯鄲枕』では、柳沢の、將軍に奢侈を勧め、色に迷わせ、金脈、人脈を操って勢力の拡大に腐心する、悪徳政治家の面のみを書きたて、具体的な政策面への関心は、実録体小説でありながら、淨瑠璃「桜御殿五十三駅」より、むしろ薄い。また「桜御殿五十三駅」モト版では、主要な二人の女性、北の方と蘭の方の行動も、最高権力者の生死との関連において、「国家」と結びつくものを持つ。⁽⁷⁾

B以下の改訂の基本方針は、このような国家的、政治的視点を劇の中心から排除し、現徳川封建体制と無關係の、ある家——一大名家でも、過去の架空的な東山將軍家でも——の跡目相続をめぐる忠臣、奸臣、妻妾等の確執をみせる、お家騒動の枠にはめこむことにあった。

その点の、もっとも端的な表れが、(4)宗純法親王一休の密書の内容に
関する、A(將軍殺害の指示)とB(蘭の方殺害の指示)の違いであ
るが、(4)の將軍後継者決定に関する、A「腹胎の男『子に國家を譲る
墨付を。蘭の方にあたふる間。汝後見と成て。弥』忠勤勵むべし」を、
B「子に二代の跡目此後迎もかはりなく家國を大切に。弥」と改め、
最高権力とその行使に関わる「國家」「墨付」を避けたことも、同様
の意味を有する。

「桜御殿五十三駅」におけるモト版からBCDへの改変は、単に諷
刺的辭句が削られたということではなく、講釈や実録体小説の分類に
よる「御記録読み」と「お家騒動」という、二つの等価値のものの、
一方から他方への移行、でもなく、明和四年十二月「三日太平記」
(光秀劇)、明和六年「近江源氏先陣館」・明和七年「太平頭整飾」(大
坂落城劇)、明和八年「桜御殿五十三駅」と、現徳川幕藩体制の、権力
の出自と、その転換期における動揺の諸相を、演劇の場で追求し続け
てきた近松半二にとって、無残な敗退であった。この、お家騒動物へ
の転落の延長線上に、「桜御殿五十三駅」の前半部を、そっくり流用
した加賀騒動物の江戸浄瑠璃「加賀見山旧錦絵」が成立する。

「桜御殿五十三駅」に続く竹本座四月興行、半二の新作浄瑠璃「驍
方武士鑑」は、赤穂事件劇。戯曲内容の低調さとは別に、半二の御記
録読み路線への固執、という点から、留意されてよい作品であるが、
その点に関し、もっとはっきりした態度を打ち出すのが、次の安永二
年七月二十八日、竹本染太夫座の「時代義経 いろは蔵三組盃」である。

従来「いろは蔵三組盃」については、赤穂事件に淀屋事件をとり合
わせたとする、『近世邦楽年表』等の解説が行なわれてきたが、三組
盃と題するからには、三つの話の組合せである筈で、事実、初段から
第五までは赤穂事件、第六から第八が淀屋事件、その後第九、第十で
は、將軍義詮の重臣金沢弾正の謀叛が描かれる。この三つめの謀叛人
劇が、ほかならぬ柳沢騒動物である。

義軍義詮(綱吉)の幕政を預る執権飯田多門頭(井伊掃部頭)と出
頭金沢弾正(柳沢美濃守)は、塩治判官、高師直の殿中刃傷事件や
塩治浪士四十余騎討入り後の処断、豪商淀屋への金の鶏献上命令など
を下す(第一、第二)。將軍は酒色に耽り、忠臣の多門頭は疎まれ、金
沢は自邸に華麗な新御殿を設けて將軍を迎え、淀屋閑所により没収さ
れた諸道具を、私に禔応の具に用いることを、多門頭の子息左近(矢
木主税?)に反対される。將軍は、懦弱を諷める左近を斬り捨てよう
とし、金沢はこれを止め、かねて將軍が懸想する自分の妻系萩を、
左近の代りに小姓姿に仕立て、「御手討なりと又はお手生なり」と
差し出すので、將軍は満足し、貞淑な系萩は主君と夫の非道を歎く。
金沢は、妻献上の願末を知る女達、小姓達を悉く殺害する。左近は、
金沢が自分の命を助け、父多門頭に恩を売り、謀叛に加担させる心底
とみて自害、金沢は足利尊氏に滅された新田義貞の遺臣篠塚伊賀頭と
名乗り、義詮の乗り物に矢を射かけるが、系萩が身替りとなる。多門
頭はかねてより金沢の謀叛の計略を見抜き、新田義治の公達に新田家
を再興させようと約するので、金沢も納得して死ぬ。

右の梗概で明らかな如く、第九第十の二段（五段組織にして一段分足らず）の中に、『増補日光郎鄆枕』や後の『護国女太平記』にまとめられる柳沢騒動譚の、將軍殺害の件を除く、通俗なポイントが、実に要領よく組み込まれている。「桜御殿五十三駅」と本作とを比較すると、同じ柳沢騒動を扱い乍ら、前者はいわば御記録読み風を重視し、本作は専らお家騒動風に傾いた結果、一見別の題材に基く脚色のようを受け取られる。將軍の放蕩、邪恋は「桜御殿五十三駅」よりあくどく（妻を金沢の方から將軍に差し出す形は「桜御殿五十三駅」より『増補日光郎鄆枕』に近く）描かれるが、お家騒動的趣向の一類型として終始する限り、不穏当とか、改訂云々の対象とはならぬことを、半二は十分承知していた。もっとも「いろは蔵三組盃」に、国家的視点が全然存在しない、と断定することは誤りである。

明和後半から半二の敵手となった菅専助は、安永四年正月豊竹此吉座に、天草軍記に柳沢騒動をからませた「軍術出口柳」を書卸した（若竹笛躬らと合作）。比企判官が、將軍頼家を、愛妾小柳（実は比企の妻）の艶色に迷わせる人物構成は、『頼朝三代鎌倉記』（桜御殿鄆枕）、海音作「鎌倉三代記」の系統に属し、他方、『増補日光郎鄆枕』の挿話で「桜御殿五十三駅」が扱わなかった、甲府綱重・綱豊（家宣）父子の忠臣根津宇右衛門の件りが、クローズアップされる。但し、構想の中心は天草軍記にあり（『近世邦楽年表』も典拠は「傾城島原蛙合戦」とのみ）、比企判官の野心は、七草城蔵（天草四郎）の主人のための謀叛の一部に、組み込まれている。

島原の乱と徳川將軍刺殺事件——一見極めて大胆な着想を持つ本作に、しかし実際には現体制や現代史に対する作者独自の姿勢は、全く認められない。七草城蔵の行動自体、頼朝に滅された一大名、伊達泰衡の遺臣の私的復讐（言わばお家騒動的）の範囲を出でず、幕府、国家等は、視野に含まれていないのである。問題の、御台所による將軍刺殺に関しては、頼家の正室三ヶ月御前が、源家、四海のために、忠臣北条義時（井伊掃部頭）の進言を聴き、夫の殺害を一旦承諾するが、結局、自ら諫死することで、頼家を一念発起させる筋立てである。

『増補日光郎鄆枕』の御台所とても、諫死により綱吉の心を籲させうるならば、当然その途を選んだであろうが、その解決が不可能な段階に立ち至っている故に、夫を弑するという深刻な事態が生じたので、「けいせい郎鄆枕」「桜御殿五十三駅」でも、この一線は保持されてきた。専助らの場合は、前提を崩す安易な態度と言わざるをえぬ。

安永二年の「いろは蔵三組盃」、四年の「軍術出口柳」、柳沢騒動に對する、半二と専助の取り組み方は、対照的である。

「いろは蔵三組盃」は、安永期の近松半二の⁽⁸⁾、また浄瑠璃界全体の、混迷を表わす如く、主軸となる赤穂事件劇の部分など、前年の「騷方武士鑑」より、一層の頹廃が目立ち、柳沢騒動劇の部分も、それだけを取り出せば、「桜御殿五十三駅」改訂版よりさらに後退した、通俗な興味を満足させるものにすぎない。赤穂事件と淀屋事件をとり合わせ、武家と町家、時代と世話の対照をみせることも、既に先例があるけれども、それに柳沢騒動を加えて、三つの事件を、一望のもとに収

めた「いろは蔵三組盃」は、三つの筋の単なる寄せ集めではなく、五代將軍綱吉治世下で幕府が遭遇した三つの重大事件——幕府対大名・家臣団、幕府対豪商、そして柳営内部、に生じた矛盾——を互いに関連づけて描き出すことで、辛うじて御記録読みの方を貫いている。

一方、世話物作家菅専助らにとっては、天草軍記も『増補日光御影枕』も、八百屋お七やお染久松の家族関係を描くに等しく、木津右門の老母・七草城蔵の老父母の、息子に対する、小柳の嬰兒に対する、恩愛、愁嘆を引き出すための道具だてにすぎず、もとより公権力との摩擦を生むような脚色とは、無縁である。

七

安永期における、半二自身、及びライバルによる、柳沢騒動劇展開の方向を考慮に入れる時、先行する「桜御殿五十三駅」で、半二が意図したところが、より明確になる。いずれにせよ、「桜御殿五十三駅」は、『増補日光御影枕』をそのまま浄瑠璃化したものではなく、二二五頁に掲げたように、『増補日光御影枕』を原拠としながら、全く別の筋に作り変えたところが少なくない。「桜御殿五十三駅」が、従来、柳沢騒動物として、十分認識されなかった所以であろう。

たとえば「お犬」「犬引早介」（犬医者今川平助——増補日光御影枕）などを再三用いて、犬公方のイメージを喚起しながら、その実体は、生類憐みの令とは別の「宗純親王お手飼の犬（スパイ、懐刀）」蛭川新

右衛門、という設定である。但し「お犬」の機嫌取りに、幕府の錚々たる役人達が東奔西走させられるところは、やはり犬公方の諷刺であり、それは題名「桜御殿五十三駅」の出所とも関わってくる。

『増補日光御影枕』に、柳沢が自邸に將軍を迎え、御座の間の庭前に東海道五十三次の道中の風景を作り、將軍を旅人に、大名の奥方達を赤前垂の茶屋の女に仕立てて、歓楽を尽さしめる条がある。「桜御殿五十三駅」ではこれを作り変え、宗純法親王一休から、幕府の目付役に遣されたお犬蛭川新右衛門を、もてなすために、岩見始め幕閣が智恵を絞る、五十三次を庭の内にとり入れてみせる。が、新右衛門は「此男以前から、道中をさまざまにかけ。正真の五十三次を見飽ておるに。是第一珍らしからず」と一蹴する。新右衛門は、一休の弟子になる以前は、関の地蔵という道中稼ぎの盗人であったから、五十三次は、まさに彼の生活の場に相違ない。

「桜御殿」Ⅱ江戸城（城門の連想から）を冠し「五十三駅」と題する時、それは柳沢邸における將軍遊興の一コマなどではなく、日本の大動脈、幕府支配の象徴ともなりうる。しかもその支配の裏街道を往來する盗人やお尋ね者が、最高権力の奥深く喰い込んで「五万石や十萬石の。雲助大名が何に成。手前共（蛭川）や其元（岩見）の様に地の底から天上迄。しりぬいた互の中」と、自身の才幹で、形骸化した体制にゆさぶりをかける本曲の構想は、元禄宝永（柳沢）と明和安永（田沼）を結ぶ線上で、単なる絵そらごととは断じ難い一面を持つ。この「桜御殿」の場に先立つ第九「朱雀野」で乞食達の縄張り争いを、

大仰な謀叛人劇仕立てで見せる趣向も、「九段目の茶利場は、まったく以後の展開と無関係な、ただおかしみを見せるだけの段で、この時期の浄瑠璃が段と段のつながりを失いつつある一つの例」（浄瑠璃作品要説³ 近松半二篇）と否定してかかるのは表面的読解で、作者の諷刺的意図を認めるべきであろう。

「桜御殿五十三駅」と『増補日光郎鄺枕』では、先にも触れた如く、主人公柳沢（岩見）の性格にも、主人公と妻と將軍との関係にも、かなりの相違がみられる。特に問題となるのが「桜御殿五十三駅」の主人公、宗純法親王一休の存在である。当今の弟宮、草庵に住み、上人の如く慕われる民間宗教家、しかも権謀術策に長けた政治家——『増補日光郎鄺枕』にも、「けいせい郎鄺枕」にも、全く登場しないこの人物像を、半二はどこから導き出したのか。単に「東山の世界」から派生する古典的人物一休を、半二の好みに合せて作り変えたただけであろうか。

いずれにせよ、主人公の性格が『増補日光郎鄺枕』とは甚だしく相違し、全く新しい副主人公も設定されているからには、「桜御殿五十三駅」の近松半二にとって、『増補日光郎鄺枕』は、手段であって目的ではなかった。ではその目的、浄瑠璃作者近松半二が「桜御殿五十三」で提示すべきテーマは——本稿でも部分的に言及したが、この点をさらに掘り下げるためには、明和八年以前の近松半二の作品との関係が、祖上に上されねばならない。

本稿作成に当り、延広真治氏、長谷川強氏、併びに鳥越文蔵教授より御教示を賜わった。また千葉胤男氏、大阪市立中央図書館、大阪府立中之島図書館、関西大学附属図書館、京都大学附属図書館、国立文楽劇場、国会図書館、松竹大谷図書館、大東急記念文庫、東京芸術大学附属図書館、東京大学教養学部国文学研究室、東京大学文学部国語学研究室、天理図書館、文楽協会、早稲田大学附属演劇博物館、及び東京都立中央図書館、早稲田大学付属図書館には、「桜御殿五十三駅」正本その他の資料閲覧を許された。併せて、厚く御礼申上げる。

註

- (1) 「花扇郎鄺枕」は浄瑠璃「御所桜堀川夜討」五段目景事の題名。
- (2) 勿論、原初「日光郎鄺枕」以来の筋、趣向を含むが、その点は、いちいち断らない。
- (3) 江戸將軍家に対し、特に八代以後、微妙な立場にある尾張藩内での上演、という事情を考慮すべきか。なお『耳嚢』『甲子夜話』に江戸尾州侯邸に、五十三駅の体を模した庭園があることを伝える。
- (4) 『浄瑠璃作品要説 3 近松半二篇』の梗概は、モト版によったか、改訂版によったか、要領を得ない。
- (5) 鐘太夫の役場は、演博本（モト版。一一九〇）では、八十四ウの「高殿。へさして」の上欄外に「鐘」と書入、国立文楽劇場本（埋木本）では八十七ウの終行「台子の間々」の上に「ヨクリ」を記し、上欄外に「鐘」と記す。しかも演博本もこの所に「ヨクリ」の書入があり、抹消して貼紙を施す。興行中に変更があったか。
- (6) 拙稿『太平頭藝飾』の諸本—伊原本『太平金兜鎧』を中心に—（『演劇学』七）。
- (7) 二女が国家のために重大事をなした、という意味ではない。たとえば

蘭の方が將軍を落とさなくても、多門頭と蟻川の間で、將軍の安全確保の処置はとられていた。

(8) 松井今朝子『近松半二小論』及び拙稿「近松半二のドラマツルギー」
 『歌舞伎』十八)「人形浄瑠璃文楽の上演形態をめぐって」(『日本演劇学会紀要』二十四)。

(9) 但し『元宝莊子』では「桜田御殿」は綱豊郎をさす。

* 本稿再校時にみることができた名取美枝「実録体小説の研究——『日光邸鄺枕』の変転」(成城大学近世ゼミナール会報・近世レポート第二号)を加えておきたい。